

第33回
リオ先生に出会ってからの15年
中村安希（ノンフィクション作家）
平成28年5月8日



リオ先生に出会ってからの15年

早川 みなさま、こんにちは。時間になりましたので、ただいまより第33回名田庄多聞の会を開催いたします。今日はノンフィクション作家の中村安希さんに来ていただきまして、ここに掲げているようなタイトルでお話を伺います。中村さんは震災の起こった5年前の2011年の5月に一度来ていただいて、そのときは「世界を旅する」という題で話を伺いました。それでは中村さん、よろしくお願いいたします。

中村 みなさん、こんにちは。中村です。先ほどご紹介いただいたとおり、ここには5年前に来てさせていただいて、お話ししました。前回はこの建物の向かいにあるぼろぼろのビルで（爆笑）講演させていただきましたが、あのビルまだあるかと思いましたが、こちらに移転されたようで、こんな豪華なところでお話しさせていただきました。嬉しいです。

今回は旅の話でしたが、今回は違う話をしてみようと思います。この5年間で変わったことと云えば、私が5歳年とってしまったりということですが、その間、旅以外にもいろいろ執筆する機会がありました。そのひとつとして『リオとタケル』という作品を書きました。この『リオとタケル』のリオ先生について今日は話したいと思います。

ゲイのリオ先生と出会う

リオ先生は私がアメリカの大学に留学していたときに知り合った恩師

の先生で、そのときから15年くらい経ちました。そのリオ先生はゲイの先生ですが、その先生を知ってからどんなことが起こったか、『リオとタケル』をなぜ執筆したか、今どうなっているのか。いわゆるLGBTですが、その問題と今どのように向き合っているのか、そのようなことに関して順番にお話ししたいと思います。旅の時の話と違って、どのようにして質問を募れば良いのか、とてもプレッシャーがあるので、質問できそうなことを考えながら聞いてください。

いま、LGBTとさらっと言ってしまったのですが、LGBTはあまり聞き慣れていない方もいらっしゃるかと思いますので、一通り説明します。LGBTとは、Lはレズビアン、Gはゲイ、Bはバイセクシュアル、Tはトランスジェンダーの組み合わせで、いわゆるセクシャルマイノリティー(注、日本語では性的少数者)と言われる人たちの呼び方です。レズビアンは女性と女性の同性愛者ですね。ゲイはすべての同性愛者を含む言葉なのですが、日本では一般的に男性と男性の同性愛者を指しています。バイセクシュアルは男性も女性も好きな人、両性愛です。トランスジェンダーは自分の性を転換する人です。

私がゲイのリオ先生と出会ったのはカリフォルニア大学の芸術学部演劇科でした。この学部がどういうところかと言いますと、カリフォルニアなんですけど、いっぱいゲイがいるのですね(笑)。芸術の分野ってけっこう自由で、どんな人でもどんなセクシュアリティの人でも受け入れますというところがあるので、私、もともと三重県の出身なんですけど、そういう世界をなんにも知らずに行つて、しかもカリフォルニアの芸術学部に入つて

学部の男の子の半分くらいがゲイだったと思います。私は当時そういうことがよく分かっていたなくて、アメリカに行つたらかついい彼氏を作ろうと思っていた私にとっては、非常にとてもチャンスが少ない、せつかくいい男を見つけても彼は私に興味がない状況で、悲しい大学時代を過ごすことになりました。リオ先生をはじめ、他の先生もゲイの先生がいて、そういうことにいちいち驚いてられないような、そんな学部でした。芸術学部演劇科で、ミュージカルもやるし、デザインもするし、それで、デザインナーさんや役者、ダンサー、シンガー、そんな人たちがいるところでした。

リオ先生との出会いは、2001年の9月11日、この日何が起きたか覚えていらつしゃいますか。

(会場から、ツインタワーのテロ)

そうなんです。ツインタワーが爆発した日です。ちょうどその9月からこのカリフォルニア大学で勉強をはじめた予定だったので、突然ああいふことが起きて、大学も封鎖されてしまつて、大学にも行けない状況になつて、街にも戦車などが出てきて、街で身近に戦車を見ることは普通はないのですけれど、そういう戦時体制に入つてしまつて大変な時期だったのです。このときに、リオ先生はちよつと変わつていて、いまから学部で、「ナガサキレイン」という演劇のプロジェクトをやりますと、いきなり言い出して、オーディションでそれにする学生を募りますといわれて掲示板に案内ができました。

「ナガサキレイン」って、なんで日本の名前が付いているのだろうと思つ

たのですが、日本に投下された原子爆弾について、アメリカで学生を集めてプロジェクトをやりたい。そのときはテロ攻撃を受けたので、アメリカというのは、自分たちアメリカというのは、かわいそうなアメリカ一色だったのですが、自分たちが昔痛めつけた対象である長崎に絞って演劇をやりたいと言い出したのですね。

アメリカでそういう逆のことをやるということは変わっていることなんですけれど、そういうことこそやるべきだと言って、学生を募り始めて、幸運なことに私は日本人の学生だったので、オーデイションに通って加わることになりました。「ナガサキプロジェクト」は十数名の学生が集まって演劇をやったのですが、いろんな学生がいて、もともとうちの学部というのは、ブロンド・ブルーアイ系の将来ハリウッドに行つてスターになりそうな子たちがどさつと集まっている学部なので、基本的に白人が多いのですよ。カリフォルニアつて移民がすごく多いので、それ以外のキャンパスは半分以上がアジア人なのですが、うちの学部だけはブロンド・ブルーアイ系でした。黒い髪をしている人はほとんどいない状態なんですけれど、リオ先生はその中で、わずかしかない人種の中で、アフリカ系もいましたし、そのとき敵視されていた中東のイスラム系の子もいましたし、韓国人もいましたし、そういう子たちを集めて演劇をしました。

そのときに、みんながお互いにどういう人か自己紹介をすることがあつて、あなたの家族はどんな人ですかと訊かれて、アメリカだったら、たとえば、お父さんはイタリア系とか、イスラムのシリアから来ていますとか、お母さんはエジプト人ですか、そういうのは普通にあるのです。

そういうのを紹介していて、家族にどんな人がいるか訊かれては、リオ先生が自分の家族に日本人がいると言ったのです。ははあと思つたのですが、見た目すごく白人の先生なのに、おじいちゃんなんか日本人なのかと思つたのですが、どうやら奥さんが日本人らしいと分かつて、そのあと雑談していたときに、その頃私英語がへたくそで、アメリカ生活3年目だったので、先生に「私英語がへたくそで習うのが難しく」と話したら、「いや、分かるよ、僕にはタケルという知り合いがいて、日本人のだけれど、25年間アメリカにいてそれでも英語が難しいと言っているから、君もそんなに心配しなくても良いよ、まだ3年目だろう」と言つてくれたのです。

「えー、タケルという友達がいるのだと思つていたのですが、そのまま学校が始まつて徐々に徐々に分かつてきたのは、リオ先生の奥さんは男性であると、その奥さんはタケルさんであるということがだんだんだん分かつてきて、ああそういうことと思つたのですが、周りにいっぱいゲイの人がいたので、驚きようもなくやつと分かつたのですね。

そしたら、タケルさんがリオ先生に「今回新しく日本の子が入つてきて安希というのだよ」と紹介されて、リオ先生からいきなり私に電話がかかつてきたのです。「日本人の学生が今回入つてきたというので、どうしているか思つて電話したのだよ」と。「アメリカ生活はなじんできたかい、日本食はこのスープに行けば買えるよ」とかいろいろ教えてくださつて、その最後に「ところで、米国に来て恋人はできたかい、ボーイフレンド？ ガールフレンド？」と聞かれたのです。

これ、日本にいて「恋人できた？」と聞かれて、普通「彼氏いるの？」と聞かれるのですよ。これまで「彼女いる？」と聞かれたことは一度もなかったで、すごく新鮮というか、アメリカでは「ボーイフレンド？ ガールフレンド？」と聞くのはありだなと思いました。それがリオ先生との最初の出合でした。

「君、好きな人、男？女？」

それから、カリフォルニア大学の演劇学部で勉強していたのですが、あるオーディションのクラスを受けていたのです。オーディションつて2分間くらいでわあーつと演技をして、それで採用されなければいけないのですけれど、その授業というのは大学院生といっしょに受ける授業で、ものすごく厳しい先生がいたのです。私一人だけ英語が下手すぎて、周りみんなブロード・ブルーアイのすてきなアメリカ人の学生しかいないので、ひとりちよつと困っていたのですね。そしたら、あるとき先生が「ああ、これは本当に英語がへたくそだな、だれかなんとかしてあげてくれないかな」と言ったときに、一人だけ手を挙げてくれた子がいて、その子が大学院生のアマンダという子だったのです。

彼女はすごくコメディイが上手で、長いブロンドの髪に輝く緑色の目をしていて、非常に才能もあつて。というのも、大学院の演劇の学部に入ろうとすると、ものすごい競争を全米で勝ち抜いてしか入れないので、彼女は誕生日が私と一日違いで同い年なのですが、その年齢で大学院

に合格しているというのは、ものすごく才能があるということなのです。そんなに才能があつてそんなに美人で誰からも好かれて笑いもとれる、そんな子が自分の英語の面倒を見てくれると手を挙げてくれたのがとても嬉しかったのです。そんなにみんなから好かれるアマンダだったらきつとすてきなボーイフレンドがいてるのだろうと思つてたのです。英語を教えてくださいなあと、これから恋人に会いに行くとか言つていたから、自分の中ではすつとすてきなボーイフレンドを想像していたのですけれど。それから何年も経つたあとで、フェイスブックでありますね、フェイスブックでアマンダと繋がつて、そこに「婚約中」とあつたので、ああ、あの美人のアマンダは婚約したのだと思つていて、婚約相手が分かるので、それをクリックしたのです。そしたら、出てきたのが、栗色の長い髪をしたエイミーという女の子だったのですよ。「ええー」と思つてびっくり。アマンダつてそうだったのという感じで、こんどはレスビアンが身近な存在になったのです。

ちよつどその頃、私にすてきなという女の人がいて、ちよつど旅をしているときに、いまはISなどでぼろぼろになっていますが、シリアというイスラム教の国を散歩していたのです。スーク（注：野外市場のこと）でいきなりはげつぽいおじさんに呼び止められて「君、好きな人はいないのかね」といわれて、わあつ、変な人がナンパしてきたと思つたのですが、そうではなくて、「君、好きな人、男？女？」と言われたのですよ。イスラム圏で、まさかそんなことを聞かれるとは思つていなかったのです。正直びっくりして、誰かにスパイされているのかなと思ひチェックしてみ、違ひみ

たいで、スークのおじさんはゲイでした。イスラム圏にもゲイの人はいて、よく考えたら「ボーイフレンド？ガールフレンド？どっちがいるの？」という質問は、意外とありかなど。そういう世界が自分に近づいてきたのです。

そんなことをやっつてうちに、今度は「Kotoba」という集英社が出している雑誌があるのですが、そちらに「いろいろ婚」という変わった結婚の様式をとりあげて行くという連載の企画がもちあがりまして、それを執筆することになりました。もともと、これは、たとえば、日本人と中国人のカップルとか、インド人と日本人の女の子とか、そういう今までは違う結婚、そういうのを順番に取り上げていく企画であったのですが、いかんせん、プライベートに取材してその話を連載で載せるのはけっこうハードルが高くて、取材を受ける直前になってドタキャンがあったり、せっかく取材ができて掲載の直前になってやっぱり載せて欲しくないという人がいるのですよ。そうなるとそのあとがけっこう大変で、ふたつくらいがんとドタキャンがあつてもう原稿も何もないときにどうしようと思つたときに、そういうえばゲイやレズビアンのカップルもいろいろうちにあるのではないかなとなつて、急遽アマンダに連絡したら「ああいいよ、取材においでよ」となつてそのままロスアンゼルスに飛んでいつて取材しました。

その次に、また、ドタキャン事件がいろいろあつて、もうダメだと思つたときに、まさか自分の先生を取材して、カップルですと記事に書くことなんかできないよなと思つていたのですが、リオ先生に「あなたのかわいい

教え子ちゃんが困つているのです」と泣きついたら、「全然、オッケーだよ、おいでよ」とウエルカムしてくれて、そのときにリオ先生とタケルさん、タケルさんも先生なのですが、二人とも取材することになりました。

取材して思つたのは、彼ら彼女たちは同性愛者なのです。自分にとつては、それまで思い描いていた「同性愛者」というのと、自分が取材したアマンダとかそういう人の印象とか雰囲気とか、それがあまりにも違う。これはなんなのだろうなと思つて。しかも自分自身もその当時好きな人がいて、その人は女性だったのですよ。なんか、そのときは、自分は、ああ自分は同性愛者なのだというような思いも特になつたですし、結婚した男の人も好きだったので、よく分からないのですが、これは世間一般でいうところの、同性愛者に入るのかなど。なぜか、それまで自分が思つていたものと実際身近にあるものとがどうもかけ離れてくるので、これは何かおかしいのではないかとということ、もうちよつときちんと調べてみようということが始まつたのです。

イメージとのギャップに混乱

ゲイというと、よく言われるのは、新宿二丁目のイメージ。そこは、夜の世界、ポルノといったイメージ。それから、プライドパレードですね、今東京ではレインボーウィークとか、レインボーパレードとかやっていますけれど、政治的お祭り騒ぎのイメージがあります。それから、マツコデラックスなどのオネエキャラ、ああいうのが私にとつての同性愛者のイメージ

ジだったのですが。それから、女の人ですと、フェミニストですね、マッチョで男勝りで戦う女みたいなイメージ。それから、いろんな迫害を受けたり、自殺する人がいたり、HIVに感染して亡くなるとか、そういう人たちは悲劇のひとつであるというイメージ。このようなイメージがあつたのですが、どうも実際に自分がおつきあひしているLGBTの人たちは雰囲気が違う。ということでもっといろいろ知りたいということと彼らにインタビューして本を書くことになりました。そこで『リオとタケル』を執筆することになりました。

『リオとタケル』を執筆する

このスライドは『リオとタケル』の表紙ですが、左側がタケル先生で右側がリオ先生です。イメージですけれど。



インタビューしたのは、リオの家族、タケルさんは日本で大学を出るので大学時代の日本人の友人、大学院は二人ともカリフォルニアの大学院を出ているのでそのときの友達。それから二人は舞台のデザイナーをしているデザイナーなので、デザイナーの同僚たち。そのあと大学の先生になつているので同僚と教え子。

実際の二人はどういう感じかというと、新宿二丁目ではなくて、昼間大学で講義をしている先生なので。これはだいぶイメージが違いますね。それからプライド、パレードともだいぶ違つていて、タケルさんは特にノンポリですね。いまお年が六十五過ぎなので、日本で学生運動が盛んな時に学生生活を送っているにも関わらず、超ノンポリという変わった人なのです。権利を主張したりするタイプでなくて。リオ先生はベトナム戦争反対運動をされていたので、ポリティカルではあるのですが、すごくインテリ系の人なので、バリケードを作つて暴れるとか、そういう感じの人ではないですね。それから二人とも全く女装はしていません。さっきの本の表紙にあつたようなイメージ通りの男性の格好をしています。それから、これはリオとタケルのことではありませんが、アマンダとエングのことですが、二人もフェミニストでは全然なくて普通に仕事をしている女性です。

LGBTの人たちはかわいそうな運命の人たちと思われたりするので、リオとタケルの二人は全然違つてアメリカ中のあらゆるデザイナー賞を総なめにしてきたトップのデザイナーで、タケルさんなんかは、とても有名なエミー賞というのがあるのですが、それにも過去にノミネー

トされて、日本でも報道されてもよかったですのではないかと思えるほど、活躍された方です。大学でも非常に人気がありますし、周りのデザイナーさんとか同僚ともすごくいい人間関係があつて、差別とかはされていない人たちです。これもちよつと意外だったのですね。

いろんな人にインタビューをはじめを見ると、ゲイの世界にもいろいろあるのだというのが見えてきました。たとえば、カリフォルニア大学の同じアーバイン校の教授でロバート・コーエン教授という人がいるのですが、いままでリオとタケルといつしよに仕事をしてきてどんな感想を持たれていきますかとインタビューに行ったら、コーエン先生の身の上話のようなのがいろいろ出てきて、コーエン先生のおじさんが昔ゲイであつたと。ただ、そのおじさんが生きていた時代というのは自分がゲイであることを絶対外に言えないような差別の時代だったので、おじさんはそれを最後まで人に言えず、甥っ子のロバート・コーエン教授にも言えないまま自殺をしてしまふのです。そのおじさんが亡くなったあと、いろんな人権運動がわあーと起こつて、ゲイの人々がすごい怒つてこんな差別は許されないと、だんだんと権利を獲得してきていまに至るのですけれど、それがもう少し早く起きていればおじさんは自死せずにすんだのにと。おじさんはすつこく優しくてインテリでハンサムな人だったらいいのですよ。大手の映画会社で働いていて、そういう人が亡くなったという話を聞いて、いまではLGBTつてけっこうオープンにできるようになってきていますし、パブリックなところでも盛んに議論されるようになってきていますが、昔はそうでなかったということが分かりました。

いろんな家族のカタチ

それから、インタビューした人たちの家族がなんかちよつといろいろな家族で、面白かったです。リオとタケルが昔いつしよに仕事をしたテレビディレクターで、この人もすごく大金持ちで成功している女性ですが、リー・シャナト・シヤネルさんというのですが、その人に会いに行ったのですね。そしたら、ハリウッドの坂の上をどんどんどん車で上がつて、生け垣みたいなのがあつて、敷地が広いのでどこが玄関なのか分からなくて、その周辺をぐるぐる回つて玄関を探していた、それくらい金持ちだったのです。家に入ったら、プールはもちろんあての家には付いているのですが、それ以外にサッカー場とパターゴルフなどがあつて、すごい人だったのですが、気さくですてきな方で、取材時に69歳だったかな、おじさんがいらつしやつて、そのおじさんは自分の子どもでなくて養子縁組みで、一人は女の子で中国からもらった子で、もう一人は男の子でプエリトルコからもらった子で、旦那さんは俳優さんなのです。まあ、ちよつと変わった家族なのですが、自分たちは普通だと思つて、家族愛に恵まれて生きていて、それで近所の人に会うと、自分たちと子どもたちとは見た目が違うので、「この子たちはね・・・」となるのだそうですが、二人は白人のカップルなのに、息子はプエリトルコなので中米系の顔ですね、もう一人はアジアの顔をしているのですね。そのときにリーさんは養子であることを隠さないで、「ああこの子たちはわたしの養子の子どもなのよ」と普通に紹介していると言っているのですね。別に自分たちは間違つ

たことをしているのではないので、堂々と自分たちのことを表明していき
すと言っておられました。日本ではそういうことはあまりやらないので、
子どもが成長するまで養子縁組を隠しておくとか、けっこう隠蔽型な
のでそこが違うなと思いました。

それからオレゴンシエークスピア祭の芸術監督で、この人は2014年に
アメリカ最高峰のトニー賞の芸術監督賞をもらっている人で、アメリカの
芸流界ではトップの人なのですが、この人も実は旦那さんがいらつしゃっ
てゲイなんです。彼らにも養子でもらった子どもがいて、男の子ふた
り、普通に生活していると。子ども達もすくすく成長していますし、な
にも問題ないということです。

それからさつき出てきた、おじさんが自殺してしまったというコーエン
教授ですが、コーエン教授にインタビューしていたらちょうど奥さんが買
い物から帰ってこられて、ごあいさつしたら、奥さんの双子のお姉さん
がレズビアンで、パートナーといっしょに女の子を育て上げたのだそう
です。いやあ、次から次へとでてくるものだと思います、びつくりして
ください。そのお姉さんはもとと男の人と結婚していて、その人との間
に子どもが産まれて、連れ子を連れて今度は女の人と結婚したのです。
パートナーの女の人は初婚だったので、自分の子どもが欲しいというこ
とで人工授精で子どもを作って、二人の間には女の子が二人いて。

それで、よく、LGBTのことを話すときに、たとえば、学校の先生が
ゲイだったりすると、子どもがゲイになるからよくないとか、親がゲイ
だと子どもがゲイになるからよくないとか、そういう議論があるのです

が、もちろんゲイの人たちも親がゲイでなかった人から生まれているので
すね。その逆もあって、たとえば、コーエン教授のお姉さんの子どもなん
かは、レズビアンのお母さん二人に育てられているのですが、自分自身は
男の子と結婚して子どもが二人いる。だから、このお姉さんには孫がい
るんです。そういう家族に出会うというのが不思議な感じだったので
す。が、だんだん慣れてくるといっつか驚かなくなってきましたね。

日本の家族からの拒絶

ところが、取材中に一番ショックだったのは、日本の家族からの拒
絶がありまして、リオ先生の家族は自分の子どもがゲイであろうと夫
がいようとそれは全然かまわないということで、実名を出してどうぞ取
材をしてください、本も出版してください、といってくれたのですが、タ
ケルさんの日本のご家族に取材を申し込んだところ、拒絶されて、
しかも、タケルさんがゲイであることも家族で拒絶をしているらしいので
すね。これって、不思議で、タケルさんとリオとは30年以上、今年で40
年かな、ずっといっしょにパートナーとして生きてきて、毎年のように日
本にも来るので家族ともいつも和気藹々で、お互いに認め合った家族な
のですが、いざ出版物として実名を公表して、自分の家族の一人がゲイ
ですと世の中に知らされるのは、ちょっと耐えられないということな
です。これはアメリカなんかとは違って日本的だと思っていて、やっぱり、
日本っていうのは家族を基準として内と外という世界があるといわ

れていて、身内がゲイであるという時点で問題が自分たちの問題になるところがあるらしくて、それから世間からの圧力ですね、ここも小さな町ですし、ゲイの人にあつた方いらっしゃいますか。隠しているか言えない状況かどっちかだと思つたのです。私も三重県で育つて、ゲイの人たちに出つたこともなかつたですし、人口の5%くらいはゲイだといわれているので、絶対いるはずなのですが、言えなかつたり、そういう世間の圧力は強いと思つたのです。

さつき言つたようにアメリカにはいろんな形の家族がそこら中にいますよね、そういうところでは自分も言いやすいし、違つていても違うくらいで普通や、となるのですが、日本はみんないっしょでないとだめなので、そういう圧力もあつて日本の家族からは拒絶されてしまいました。

だから、リオとタケルは、本当はリオとタケルという人ではないのです。実名は違うのです。本人たちは顔写真を出しても実名を出しても全然平気だと言つているのに、日本の家族がそれは止めてくれということではできない状態であるということなのです。

セクシュアリティとは？

この取材を通じて、セクシュアリティとはなんなのだろうと考えたのですが、すごく自分にとって心に響いたことがあつて、それは同じくインタビューした人の中でリオの教え子でシヨーンという人がいて、彼は私より一つ年上なのですが、彼はゲイなのです。ガールフレンドがいたので

すが大学時代にその人と別れて、そのあと昔から仲良かった男の子と付き合うようになったら自分にはすつきりする、男の子の方が僕には向いていた、みたいになつて、彼は一応いまはゲイなのですが、ゲイつていつたいどういうことなのと、私がぐりぐりぐり質問したら、一生懸命答えてくれて、彼が言うのは、そもそもセクシュアリティというのは、男が好きか女が好きかというのでなくて、「誰が好きやということだ」、と言つたときに、ものすごく納得できたのですよ。

というのは、この問題つて、よく女が好きか男が好きかで語られるのですが、たとえば、じゃあ、この会場にいる人の95%は異性愛者としてしまふよね、じゃあ、ここに座つている男性の方は女性だったら誰でも良いかと言われたら、いい加減にしてくれとなりますよね。自分にも権利はあるわという話になるじゃないですか。ここに居る女性の方たちに男なら誰でも良いですかといえ、ちよつと止めてくれとなるじゃないですか。それはもちろんゲイもそうで、人を好きになるのは性別を好きになつていなくて、人を好きになつてるのです。その人がたまたま同性であるか異性であるかという程度の問題だと思つたのです。

このスライドの2番を見て欲しいのですが、これはセクシュアリティを表すときに使うグラデーションです。セクシュアリティは白黒がはつきりしているものではなくて、いろいろパターンがあると。バイセクシャルはこのあたり、まんなかあたりで、バイセクシャルは10回恋に落ちたら、ああ、5回は男でした、5回は女でしたというような人で、こっちに近づいてくと7回は異性でした、3回は同性でした、というように、ちよつと分か

らないですね。それまでは、ゲイですか、それならあなたは男が好きになるのですね、くらいにしか考えていなかったのですが、よく考えたら、まずは誰かが好きになることから始まって、その人がたまたま異性か同性か、というぐらいのものだと、私は思っています。というのも、自分がそうだから。私はいま表向きにはバイセクシャルだといっているのですね。というのも、男の人も女の人も好きになるから。

男の人と付き合っているときには、私つて異性愛者じゃないですか。それで女の人に恋をして付き合っているときは完全に同性愛者になっているわけじゃないですか。ポテンシャルとしては、いまなら7対3で女の人に好かれるのでないかな。男の人と付き合っているときは、全然レズビアンとしては想像できなくて、その人が好きとなつちやつている。だから、この辺というのは、そんなに男とか女とかいうのでなくて、自分が好きになった人が誰か、ということでないかと思えます。

それから、シヨーン君と話していて、ほうと思ったのは、ゲイであることは僕のアイデンティティーの一部ではない、という言い方をされていて、それで私が、「シヨーンつて、昔は女が好きだったのでしょう、それでいま、男が好きということはさあ、途中で自分はゲイだと目覚めるわけ・」とぐりぐりぐり訊くものだから、ちよつと待ってくれ、みたいなことになつて。ある日目覚めて、がーん、俺はゲイだとなつて、その日から俺はゲイだ、と生き始めたわけではなくて、たまたま好きになつた人が男であつたのかとなつたくらいで、彼は自分を自己紹介するときに、ゲイのシヨーンですというわけでもないですし、皆さまもそうだと思いますが、

朝目覚めたときに、私は異性愛者だ、とは思わないではないですか。人に自己紹介するときもそんなことは思わないと思うのです。考えないと思うし、まあせいぜい出身地であつたり職業であつたり、その程度だと思つたのですが、世の中の人的には、ゲイであるとか同性愛者であることがあまりに拡張されすぎて、本人たちはすごく戸惑うらしいですね。確かにそうだなと思つて、私自身が最初に女性にも惹かれていたなんて思いながらも、おお今日からレズビアンだぜつて思わずに、よく分からなけれど好きな人が女の人だがどうなっているのだろうかと思つたのと同じで、多分その程度の問題なんじゃないかと思つた。シヨーンの説明は私にはすごく腑に落ちましたね。

そういうふうにしていろいろ取材をして、『リオとタケル』という本を書いてみて、出版が2014年の夏だったのでほぼ2年が経ちましたが、その後もLGBTに関しては昨年もレインボーパレードを見に行きましたし、LGBTの運動をチェックしたり、そういう世界の人のいろいろな交流したり、最近では新宿二丁目にもデビューしたり、ただお酒を飲んで帰ってきただけでたいしたことなかったのですが、まあ、いろいろあるのですが、自分なりにその問題をどう向き合っていくか、自分のバイセクシャルだと思つていますし、最後に自分の気持ちを語りたいと思つています。

「のト。ポックとどつ向き合つか？」

この写真はリオとタケルのキッチンです。ゲイの先生つて本当にきれい

好きです。これは先生が焼いてくれたブリオッシュというパンなのですが、手でちゃんとこねて朝起きたら焼きたてのパンがあった、なんてすてきなカップルだと。



読者からの意外な反応とリオからのメッセージ

出版を終えたあとの読者の反応ですが、これが結構意外だったと思

うのは、『リオとタケル』を書いて、いわゆるコアなLGBTの人権運動などをされている方とか、自分はLGBTだという自覚がものすごく強い人たちからの反応は全くなかったということです。それはそれで意外だったのですが、もっと意外だったのは、いままでLGBTなどとは言っていないかった女性の友達がいっせいにカミングアウトしてきたのがすごく、えっ自分も！、という感じで言ってきたのですね。私はそれまで自分がバイセクシャルだとか言ってきたわけではなかったのですが、このような本を出したので、自分は男も女も好きになる可能性はありますよということを伝えているのですが、そしたら友達が「実は、私も昔は女の恋人がいたの」とか「不倫相手は女性でした」とか、いろいろ出てきて、そんなこと昔何も言っていなかったじゃん、ということがばたばた出てきたので、それがちよつと意外でした。だから、もう本当に自分のアイデンティティーとして、ゲイである、レズビアンであると定着している人たちもまた、このLGBTという世界を違う見方しているのかも知れませんが、そうじゃない人にとつては、なんとなくこの『リオとタケル』の世界は理解しやすいことであつたのかなと思いました。

出版を終えたあとにリオからメッセージが来しました。「出版おめでとう」といつてくれて、お祝いにスモークサーモンと生ハムを送ってくれて、喜んでくれました。本人たちにしたら自分のプライベートをさらけ出されているので、リオとして何が嬉しかったかというと、いままでのLGBTの本はメッセージがいつも同じだったということです。どういうメッセージかというと、LGBTとして自分たちはこんな辛い思いをしてきた、苦しんでい

るのはあなたひとりでない、僕もだ、というようなメッセージが繰り返されてきたのだと。だけど、リオ先生もタケルさんもそうなんです、僕らはそんな惨めな暮らしをしてきていないし、すつごく幸せに生きてきた。LGBTだってこんなに幸せな人生を送れるのに、それを世の中に伝えるような作品がなかったの、そのことを正直に書いてくれて僕としては満足していると言われた。もちろん、それはやりたかったことですし、そういうふうに本人が思ってくれたのは、私としても本を出してよかったです。

多分、障害を持っている人というのは、いろいろあると思いますね。もちろん、いろんな差別にあつたりとか、いろいろ自分中で抑圧を感じたりとか、いろいろ問題があつて、乗り越えなければいけない壁があるのはそうだし、だから、そういう書物が出版されるのが当然なのですが、ただ、かわいそうな人たちというところに皆集約されてしまうと、そこに違和感を感じる当事者というのは多いと思いますし、そういう意味では違う本があつても良いのではないかと私は思いますね。

さつきのレインボーパレードとか、ちよつと自分なりに知ろうとして参加してみた感想として、自分はそこまで人権運動に関わりたいとは思わなかったことですね。どんな問題でもそうですが、この世界の人がより生きやすくなるというのは重要なので、LGBTに限らずどんな問題であつて自分はサポーターでありたいと思うのですが、だからといって先頭に立つて旗を振るかというところという感じでもないですし、そもそもそういう人権運動家から反応はなかったですし、彼らに見えている世界と

自分が見ている世界とは乖離しているのだろうというのがあるので、彼らを応援はするけれどいつしよに戦うのはちよつと違うのではないかと思っています。いろんなスタンスがあつても良いので、それくらいで良いと思っています。

リオとタケル的な生き方を通して

このスライドにあるように、今回の本というのは「ゲイやLGBTについて書いたのではなく、リオとタケルという2人の人物について書いた。彼らはかわいそうな人生を歩んだ人ではなくて、私にとつて、憧れのアーティストであり、尊敬する先生であり、大切な友人で、そして何と言つても○○○○である」

この○○○○であると書いた、この4文字を当てて欲しいのですが。あとでヒントを出しますが、ちよつと考えて見て下さいね。

(会場、沈黙)

ヒントなんですけれど、リオとタケル、それに演劇が自分に教えてくれたのはなんだったのか。これはゲイの芸術監督さんで、二人の養子を育てているビル・ラウシさんの言葉です。彼は「演劇はいつも、僕にとつて聖域だった。自分を偽りなく表現できる○○○○だった。」と言っています。

次はシヨーン君の言葉です。リオとタケルについて、「彼らは安易に人を批判したり、自分の規定を押し付けたりしない。頭ごなしに誰かを否定することが絶対がない。だから僕は○○として、あの二人に対してはど

んなことでも打ち明けることができる」

〇〇としては？ ちよつと難しい質問ですね。

(会場、沈黙)

多分、みんな分らないと思うので、シヨーン君の〇〇は、安心してです。四つの〇〇〇〇の最初の〇は安です。

(依然、会場は沈黙)

安が最初に来るのですが、じゃあ、めつちやわかりやすいヒントを出しましょうか。「玉置浩二」

(会場から、安全地帯)

そうですね、安全地帯です。こんなヒントで分かってもらうなんて(笑)。ロバート・コーエン教授の話を聞いていても思ったのですが、私たちはみんな何かしらの違いを抱えて生きていて、これは別に自分のセクシヤリテイがひとと違ふとかいうだけでなくて、たとえば自分の家族構成が養子縁組みであったとか、自分のパートナーが国籍が違っているとか、みんなひとと同じというわけには行かないと思うのですね。私たちはみんな何かしらの違うものを抱えているのですが、そのことを受け入れる体制がないと打ち明けられないし話し合えないと思うのです。おじさんを自殺でなくしているロバート・コーエン教授ですが、こう言っておられます。

「我々は常に『違いについて話し合うこと』から遠ざけられていた。本当はみんな、たくさんの違いを抱えていたにもかかわらず、そのことについて話し合えずに生きていた。ユダヤ人の私自身もそうだ」

コーエン先生のおじさんというのは、自分がゲイであることを甥つ子に

も打ち明けられずに亡くなっているのですね。もしそれを言ったら、「もうおじさんなんて大嫌いだ」と言われるかも知れないと思っていたかも知れないし、家族の誰にも打ち明けずにおじさんは亡くなっているのですね。それからロバート・コーエン教授はユダヤ人なんですけれど、ユダヤ人なんか一人もないグループで育っていて、安易に自分がユダヤ人であることを言えなかったのですが、そのときに、もし周りの人がそのことを受け入れてくれたら、そういう安全地帯であつたなら、自由に言えたと思いますし、自分を否定せずに生きていくことができたと思うのですが、なかなかそういうことがいまの日本社会でも難しいことだと思っていて、私自身も女性なんかを好きになつていながら、自分がレズビアンであるとか、同性愛者であるとかは、この本を書くまでは言つてこなかったわけで、それはなんとなく、友達と話しているときも「あなた、彼氏いないの」というような無難な会話で、「実は好きな人、女の人のよ」とは言えなかったのですね。日本でそれをいつたら「うえつて」言われるのではないかと怖かつたですし、ところが言つてみたら「私もそうだったのよ」みたいな感じで、意外と安全地帯であつた。驚きでもありません。

私は実は自分の家族関係があまりよくなくて、親にも7年くらい会っていない状況なのですが、それも世間一般的に言うところとちよつと変わつていて、このことについて話したときに「そんなに長いこと会わないやつて、なんて親不孝な子なの」つて、頭ごなしに怒ってくる人もいれば、「まあ、ねえ、家庭ごことにそれぞれいろいろ事情があるから、そういう家庭もありなんじゃない」と受け入れてくれる人とすごく差があります。そういう

ことを受け入れてくれる安全地帯の人であるか、それとも頭ごなしに自分と違う者は全部間違っていると非難してくる人なのか見分けたからでないか、打ち明けられないというところがあまして、自分としてはどういう打明があつたとしても、それももちろんひとつのあり方だねと、自分も受け入れられるようにしたいですし、安全地帯を他のひとつにも広げていきたいと思っています。



この写真はリオ先生の家で作ってくれた手料理なんです、先生のおうちは私にとって超安全地帯ですね。ご飯がおいしいのは、そりゃ、安全

地帯なんです(笑)。リオ先生というのは、たとえば、そうですね、私はいまノンフィクションライターというのをやっていて、これまで世界90カ国ほど回ってこういう感じで自由に生きてきたのですが、自分がこういうフリーランスの作家になるときは、少なからず批判する人はいました。「何でふらふら世界に出て行ってやっているのか」とか、「社会をなめとるか」。私はもともとお勤めをしていましたが、そういうのを止めてしまつて勝手に生きていくということですね。それは社会人としてのやるべきことを全うしていないとかですね、まあいろんな批判もあつたのですが、それと同時に「やってみなければ分からないし、挑戦しないの」と言つてくれた人もして、その一番の例がリオ先生です。リオ先生は、多分、芸術家の卵をたくさん育てているから、しかもうちの学部を卒業した人でその分野で食べていける人は5%つていないのです。95%は何かしらその道で生きていけなくなるのですね。すごく失敗の確率の高い世界ですし厳しいことは分かっているけれど、夢を追いかけてしまうのが人だし、やつたら良いじゃないか、みたいな感じで受け入れてくれる。

まあ、自分自身は芸術家にはとつてもなれそうにもないし、そんな甘いことを言つていたのではダメだし、大学を卒業して舞台芸術とかそういう世界からは完全に離れて会社勤めをはじめたときにも、リオ先生は、たとえば、「君、せっかく夢があつたのにそれをあきらめちゃうのかい」というようなことは絶対言わないのですね。「君は、いまの年齢でやらなければいけないことを一生懸命やっているから素晴らしことだ、精一杯がんばりなさい」と応援してくれるのですね。だから、あんなに愛情かけて

育ててもらったのに芸術の世界に進めなくて先生には申し訳なくてOLになったことを言い出せなかったというようなことはなかったですし、全肯定的なところがある先生です。それはとても言いやすいですし、自身自身が、たとえば、ガールフレンドができてその人と結婚することになったとしますよね。自分がパートナーを連れて行って一番紹介したい人はリオ先生なのですよ。「私のパートナーなのよ」と紹介した人が、たとえば女の人、たとえば男の人、どちら連れて行ってもリオ先生はその連れて行った相手に対して、ものすごく大切にしてくれると思うのですね。絶対間違いないです、彼は安全地帯だから。それってすごくありがたいですね。たとえば、自分が好きになった人を家族に紹介して、その人がすごく嫌われたりしたら辛いじゃないですか。その人を受け入れてくれる人としてリオ先生がいます。

人はみんな、何かしらの違いを抱えて生きている

さっき言った家族の問題ですが、家族の問題はけっこう大きな問題だったので、本当に長い間人に言えなかったことなのです。親と会えなくなっているということは言えなかったです。あるとき親友に一回だけ打ち明けたのですよ。打ち明けたというか、その人に「お母さん、どうしている？」と聞かれて、「まあ、最近も会ってないわ」みたいな感じで、「そういえば、3年経つよね、4年経つよね」と。そしたら、友達と友達のお母さんにちよつと呼ばれてすごい説教を食らってしまったのですね。「あなたは

子どもを産んだこともないし、親の気持は分からないだろうけれど、親というのは子どもを思っていて、あなたから連絡が来ないことがどれだけ傷つけているか分かっているの」と説教を食っちゃって。その家族は家族で仲良くされているのは素晴らしいことだけれど、自分のうちには自分のうちの事情があったりして、そのときに「ああ、この話は二度と、世間一般の人に、たとえば親友であろうとするものか」と思ったのですが、あるときリオ先生にも聞かれて、「そういえば、ご両親どうしているの、元氣なの」と訊かれて、「多分元氣にしている」と何回かごまかしたのですが、ごまかせなくなつて「実はね……」といったときに、リオ先生は全くそのことを否定しなかったですね。「あなたに必要な時間をかけて、かければ良いことだから」とすつと受け入れ、しかも彼自身は自分の両親とむちゃくちゃ仲が良いんですよ。完璧な家族なのですが、でも完璧でない家族である人に対して、それをおかしいといって否定したりしない。そういう意味で彼は私にとって安全地帯ですし、私は彼のそういう姿勢を見習っていきたいなと思っています。

とらえずここで一回終わりしたいと思います。ありがとうございます(拍手)。

講演後の質疑応答

早川 ありがとうございます(ぎ)ございました。皆さん、いろいろ聞きたいことがあるか

とも思いますがいかがでしょうか。

参加者 A 面白い話でいつまでも聞きたいと思っていました。訊ねたいことはいろいろあるのですが、まず一つ目は、人間なのだから同性愛者の場合、性的役割というのはどうなるのでしょうか。どこの国でもあると思うのですが、たとえば、稚児主義ですね、男のおじやんが相手の稚児を女視したとおもうのですね。性生活の役割はどうなっているのか。ゲイでもレズビアンでも。

中村 性的な役割分担ですね、これはゲイであるかレズビアンであるか、全く関係ないことで、たとえば、男と女の異性愛の家庭であっても。たとえばどんなことですかね、性的役割というのは？ 男の人は外で働いたりとか、重たい物を持ちたりとか？

参加者 A 三島由紀夫なんかも昔からいろいろ書いていることですが、たとえば、男同士が生活をはじめたときに、簡単言う性と性生活のことですが、優しい方が女役になるとか…。そういうことはどうなんでしょうねと。

ゲイであることは僕のアイデンティティーの一部でしかない

中村 ああ、そういう話ですね。それは私は現場を見ていないので分からないですが(爆笑)、いろんながあると思いますね。その世界のポルノとかを見れば、本人たちはポルノで取り挙げられているセックスシーンとかは、自分たちがやってるものとは違うと言っていて、たとえば、私たち

が異性愛のポルノをみてもあんな性生活をしている人はいないと思うのですよ。大変なことになるじゃないですか、あれを毎日やっていたら。性生活については、本人たちがどうしたいかということであって、それは異性愛でもそうだと思うのですが、まあ、どれくらいのことを話せばいいのかよく分かりませんが、男役と女役がはつきりと分かれているようなゲイのカップルもいるとは思いますが、両方がマツチョでその役割が変わるようなカップルもいるとは思いますが。リオとタケルに関しては、どちらもマツチョだったり、どちらかが女つぼかたりではなくて、その前に座っていらつしやる方とその横の方がいつしよに暮らしている感じですね。

リオ先生が性生活について言っているのは、よくゲイの話になるとセックスの話になると。いまの質問者の方もそうですが、たとえば、ゲイのカップルがいました、そのときに一番知りたいのがどっちがどうするのだろうとか、いわゆるセックスのことになっちゃうんですね。だけど、たとえば、私たちが新婚のカップルを前にして、どんなセックスをするのだろうなんてそんなに考えないじゃないですか。その問題は本人たちはすごく嫌だと思っていて、それは自分たちの存在価値がすべてセックスに集約されてしまうからなんです。さっきシオン君が、ゲイであることは僕のアイデンティティーの一部でしかないと言っていますけれど、ゲイであることも小さな一部だし、性生活なんかもすごく小さな一部です。たとえば、結婚しましたって言って、二人の間の生活であったり関係というのはもうセックスだけなんですかといえれば、人生には長い日々があつて、いろんなことがあつて、パートナーとの関係性ってそんなセックスだけでなく、

いろんなことがあるじゃないですか。役割分担はと聞かれてどう答えて良いのか分からなかったのもそうですが、役割分担と言ってもセックスの問題以外にも関係性の中では役割分担もあると思いますし、そのことに話しが集中してしまうことがけっこう不思議というか、異性愛者を前にしたときには普通はしない質問が同性愛者を前にいたときには出てしまうとは、そういう対象として見られているのかなという感じで、まあ偏見と言えば偏見と言えるかと思いますがね。

参加者 A もうひとつ気になっていることがあるのですが、男を好きになるか女を好きになるかでなくて誰を好きになるかと言われましたね。誰かを好きになる、そうしますとね、たとえば、レズビアンの人たちの話でたとえてみると、レズビアンである人がある人を好きになったとすると、また別の人も好きになる可能性もありますね。ある特定の人がなくとも一層好きなき感じがあるけれど、そのうち別の女の人が好きになる、それはありますね。そうすると、いつしよに住むとなると、一人を選ぶことになって、世の中、不倫か浮気か知らんけれど、そういうことが起こつてくると思います。今日はあの人明日はあの人と、ころころ変えていくのはおかしいですね。人間、誰が好きになるかが大事でそれがすべてだとおっしゃるけれど、複数の人間が好きになるのは大いにあり得るので、その場合、どうなるのでしょうかね。

中村 それは異性愛でもいっぱいありますよね。
参加者 A 異性愛は、問題そればかりですね。

中村 今年はそのニュースでもちぎりでしたね、年明けてから(爆笑)。同

性愛でも異性愛でもそういうことは全くいっしょだと思えます。相手を変えていこうと思う人は行くだろうし、どれだけ他に好きな人ができて、いや相手を变えてはいかん、だつてこの人と住んでいるのだからと、踏みとどまる人はいるだろうし、それは同性愛でも異性愛でも全然いっしょだと思えます。

養子縁組のお父さん、お母さん

早川 同性の親が養子をもっているとき、その場合、お父さんとかお母さんとかいう言い方はあるのですか。男同士だと、どちらもお父さんというのか、女同士だとどちらもお母さんと言うのか。子どもが親を呼ぶ場合ですよ。あるいは名前で呼ぶのか。

中村 多分、名前で呼んでいるのでないでしょうか。両方ママと呼べないですね。

早川 マムとかダディーとか、呼ばない？

中村 そのところははつきり聞いたことはないですが、多分名前ではないかと思いますがね。

早川 ということは、子どもは普通のお父さん、お母さんとは違う感じを持つているのですかね。

中村 いや、お父さん、お母さんという感じは持っていると思いますね。
早川 どちらも女性だとどちらもお母さんと思つていいのか……。

中村 うーん、それは本人でないと思うのか分らないですね。

ただ、なんていうか、もし両方ともお母さんみたいな感じで呼んでるのかも知れないし、その可能性は十分あると思うし、ただ、私たちは一般的にお父さんがいてお母さんがいて、というような家族で育っているの、それ以外の人たちちつてというのがどういうふうにやっているのか不思議に思うかも知れませんが、でも生まれたときからそういう環境だったら、その子たちにとつてはめっちゃくちや普通の状況だと思ふのですね。だから、特になんの違和感もなく。それまでずっと自分の親のことをお父さん、お母さんと呼んでいたと呼んでいた人が、あるときから自分の親を名前で呼ぶようになったら、それは明らかに自分は違うことをはじめたという意識はあると思いますが、生まれたときから自分の親を名前で呼んでいたら、それは普通のことだと受け入れて成長すると思ふのですけれど。

参加者B 先ほどの話しの中で二人の子どもさんを受け入れて育てているとありましたが、日本的に言うとお父さんとお母さんとして、将来は遺産を相続させるとか、お二人は裕福な方みたいだし、そのあたりは日本と比べて法律的にはどういうふうになっているのか、ちよつと教えていただけますか。

中村 養子縁組はものすごく一般的に受け入れられているので、資産ももちろん子どもに譲るといふことですね。

参加者B そうすると、兄弟なんかも一切口出ししないというか、すつきり行くのですか。

中村 子どもということでも法律的に認定されれば、向こうは特に法律

に則つてドライに決めごとをしますから。つていうのは、いろんな民族が入り交じっているの、イスラム教的にはこういうふうだけれど、日本の観念ではこういうのが家族なのか、そういうのをやっていたら。

安全地帯

参加者C ありがとうございます。この安全地帯というのをもう少し詳しく説明して欲しいのと、もうひとつは、リオとタケルさんのおうちが部屋がいくつか余っていて、下宿を入れても良いなとなったときに、下宿人は女性の方が良いと思うのか、それとも男性の方が良いと思うのか、それともそんなことは思わないのか。

中村 安全地帯についてですが、どの辺が分かりにくいのかな。安全地帯というのは、自分と置かれている境遇が違うひとに対して、自分の規範みたいなのを押しつけないということですね。自分のあり方、自分の考え方というのが常に正しくて、それと違っている人が間違っているというよな見方で人に接すると、相手としては心も開けにくいですし、傷つきますし。だから、基本的には、人は皆違つていて自分と違う境遇の人にも、特にこれからの世の中はいろんな人に出会っていくことになると思うので。いままでだったら、日本だったらゲイとかはあまりいないということになっていましたし、外国人も少なかったと思いますし、適齢期になつたら結婚して子どもを産んで。そうじゃない人はほとんどいなかったの、いても陰にいたと思うのですが、いま未婚率も上がつてきていろんな生き

方が出てくると思うんですね。そのときに、マジョリティーの人の規範を基準にしてこれとあなたは違うから間違っているというような態度で接していくことは、これから違いがどんどん増えていく社会では敵を作ることになるし、大変だと思うのですよ。

ここにおられる女性の方は分かると思うのですが、キャリアを持つ女性と専業主婦になる女性の間で価値観を巡ってバトルではないですけど、どっちが正しいのとか、どっちが良い生き方なのかとか、自分が30代であるからなのかも知れませんが、ひとと違う人生を歩見始めるのが20代30代なのですが、そういうのがあつて、自分は独身でキャリアを持っているのですが、もちろん専業主婦になった友達も大切な友達で、その生き方も素晴らしいと思います。家で家事をして子どもを育てる、そういう生き方は素晴らしいと思うし、そういう友達に自分はこういう生き方をしていますと言われたときに、素晴らしいねと言えると思うし、それから、バリバリでキャリアを持っている友達、たとえば、大企業にがつちり勤めているとか、お役所勤めの人であつたりとか、それも自分にはできなかつたすごい良い生き方だと思うのですね。自分はこんなふうにはふらふら生きていますから。そんなの良いよねと思うし、それ以外の自分の生き方というのもこれも「自分の生き方だからがんばって生きていこう」と思っていますし。専業主婦の友達に、あなたは主婦業もやってないし子どももないから、そういうことが大変なのは分らないでしよう」と批判的に言われたときに、自分には自分の大変な生き方というのがあるので、そういうところをお互いに認め合っていくというか、そういうふ

うにしないとこれから世の中は生き辛くなっていくのではないかと思つているので、そういう意味で安全地帯を広めたいと思つているのだと思います。

参加者D 安全地帯を設けるのでなくて自分からいろんな人を受け入れる。安全地帯でなくても、ケンカしても別に、戦争はしたくないですが、どんどん受け入れても良いのではないかという感じがするのですが。

中村 そうなんです、その受け入れることが安全地帯であると。

参加者C なんかクローズしたコミュニティーのイメージがあつて……

中村 ああ、そういうイメージなのか。そうでなくて、クローズしていません。オープンです。

参加者C もうひとつの質問ですが。

中村 リオとタケル家に下宿人が来たときに男にするか女にするかですね。いや、どっちでも良いと思いますね(笑)。

参加者C アメリカではどっちでも良いかと思つたのですが、日本ではと思つたので。

中村 リオとタケルに関しては、アメリカであれば日本であれば、下宿人は男であつても女であつても良いと思うのですね。なんでダメなのかという理由が分からないのですが。

参加者C たとえば、ある程度、年配のご夫婦が部屋が空いているから居候しても良いよ、と言つた場合、世間は何も思わないけれど、そうじゃなくて、男が一人いてそこに女の人が下宿した場合、世間はどうかおもうとか?まあ、気にしたらアカンのだけ(笑)

中村 それはその人に依りますよね。たとえば、男の人が一人で住んで

いて、そのうちに下宿するかどうか考えたときに、その男の人がどんな人かどうか、それ次第でいいですかね。明らかに狙っているひとなら。女ならより安全と感ずるなら女の人のところに行ったら良いと思います。たとい、ゲイの先生が住んでいてそこに女の人が住む場合、性的な意味で言えば全く問題はないから安全ですね。そこに男の人が行ったとしても、それはそこに住んでいるカップル次第ですね。

たとえば、日本である男と女の夫婦がいてそこに下宿するときに、このお父さんが女の子に手を出すようなお父さんならそれはよくないから女の子を下宿人に迎えるべきでないと思うし、そのお母さんが若い男の子がめっちゃ好きというようなら男の子を受け入れるべきでないし、その夫婦がそういうのでなければ、どっちを受け入れてもいいのでないですかというくらいの話ではないかと思うのですが。違うのですか。

参加者C かつて下宿したことがあるのですが、その家主さんがそういう方だったのですが、僕は何も気にしないし、その気もなかったのです(笑) どうつてことなかったのですが、世間様の見方はどうかと。

中村 それは気にする人は気にするからいけないだろうし、気にする人は気にするから下宿できないだろうし、それは極めて個人的な問題で、私には一般化して言えないですね。

なぜ日本ではそれが言いづらいのか

参加者E 最近日本でも、世田谷区で女子同士の結婚を認めましたが、先生は先ほどの話で、アメリカでは自分がゲイであるとか言える雰囲気だとおっしゃいましたが、これから日本も、同じ人間ですから、アメリカのLGBTの人がいて日本にいないということはありませんから、もつともつと言えるような世の中になって行くと思えますか。

中村 なつて行くと思えますね。

参加者E いま、なぜ日本ではそれが言いづらいのでしょうか。なにが原因で言いづらいのか、きつとアメリカと何が違うから言いづらいのでしょうか。

中村 それは、日本がというよりは、日本は土壌としては言いやすい可能性があるので。というのは、アメリカとかヨーロッパというのは宗教に根ざした社会で同性愛はいけないことだというゆがんだ宗教解釈があるので、それをベースにした社会があると、けっこうわかりやすい悪としての差別が起きるので、非常に言いにくい社会だったのですが、向こうは白黒をはっきりさせたい社会なので、それは本当に悪なのか、それとも悪ではないのか、それをはっきりさせようと運動が起きて、それを裁判に持ち込んで、連邦政府の裁判まで行って自分たちの権利を獲得して社会的に同性婚も認められました。

特に聖書の中で同性愛は間違っていると書かれていないし、グレイズーンとかあいまいなのです。日本はもともと宗教が関係なくて、きちんとしたというか、わかりやすい意味での差別も起きてなくて、ところがアメリカなんかはそれを理由に人が殺されているような社会です

から。日本なんかはゲイだからと言って惨殺されるとかそういうことは起こらないじゃないですか。日本はそこまでヘイトクライムなんか強くないけれど、なんとなく全般的に人にものが言い難い、人に隠しておく、といったような社会的な圧力でこうなっているの、言いやすさとしては日本の方が言いやすいのではないか。それから、これからは日本社会が海外みたいに言いやすくなっていくと思う理由は、カミングアウトしている人が単純に増えてきているからですね。それは、アメリカも実はそうで、私が米国に住んでいた頃というのは、まだそんなにおおびらではなかったです。

さつき、ロバート・コーエン教授のおじさんが自殺したという時代があったと言いましたが、あの頃のアメリカは全然言えない時代でした。それが60年とか70年代でした。80年代になって変わってきて、私が留学していたのが2001年ごろですけれど、その頃はうちの学部は特殊でみんながゲイかレズビアンであることが分かっているの、言えるけれど、それが役所とかビジネスの世界とかの硬派のところでは言えなかったし、それから芸術界は不思議なんですけれど、いわゆる演劇界はオッケーなんです。でもハリウッドはアウトなのです。映画の世界であいつはゲイかも知れないと思われれることは役を失ってしまうことなので、自分がゲイであることをひたすら隠したゲイの俳優さんもたくさんいるわけなのです。

ハリウッドで、私がいた2001年ごろ、有名な女優さんのジョディ・フォスター、「羊たちの沈黙」の主演の、いますよね、あの人は多分ゲイ(同性愛者)でないかと噂はされていたけれど、本人は自分はゲイだとは言っていない

なかつたのですよ。レズビアンの人が。でも、この数年で連邦政府も同性婚を認めたし、ばーつと動きが出てきて、ラテンミュージックのリッキー・マーティンも、自分はゲイでした、実は養子縁組で子どももいますといきなり言ったし、それから、オーストラリアの水泳選手の金メダリストのイアン・ソープも、実はそうだったがずっと言えなかつたと。バスケットボールの選手もいましたし。周りがぼーぼーぼー言い出すと、実は自分もそうだったと言いやすくなっている。アメリカンなんかも変わってきたのはこの数年です。

これを日本に当てはめたときに日本でもやっとLGBTのことをテレビで見たり。パレードが新聞に載ったり自分はゲイですという人が本を書いたり、いろいろ出てきたので、カミングアウトする人が増えてきていますね。私自身もこれまで言てなかつたのに、『リオとタケル』を書いて、いきなり、自分もバイセクシャルだからさ、なんて話したら、自分の周りの友達がカミングアウトしていて、言いやすくなったのです。これでまた自分の友達も、友達と喋っていてさ、彼女もバイセクシャルというから自分も言っちゃってさ、とか。周りがどれくらいカミングアウトしているか次第だと思えますね。日本でもこれから進んでくると思います。

オネエキャラ、ゲイ

参加者F 数年前から中村さんのブログを拝見していて、おばさん、おばさんと自称されているので、てっきり本当におばさんかと思っていたの

ですが(爆笑)、きれいな若い女性で。ゲイの話ですけれど、日本でもオネエキャラが増えてきていますね。たしかに、テレビにもどんどん出てくる。一見すればゲイが認められているように見えるのですが、実はオネエキャラはほとんどがお笑いの対象なんです。宗教的にタブーでないから、ということでしたが、それはどうかかと。日本で警察官とか銀行員とかやくざとかがゲイであるときに、カミングアウトするとはちよつと考えられないと思うのですよ。オネエキャラについても、男性のゲイはどんどん出てきていますけれど、女性のゲイがテレビなどのマスメディアに出てくることは、僕の知っている限りではまずないですね。一般的に、ゲイである、あるいはゲイであるだけでなく他と異なっていることを日本で表出することは難しいのですが、女性の場合は特に難しいと思うのですが、どうでしょうか。

中村 うーん、これ、ドキュメンタリー映画などで取り上げられてきたのですが、いわゆる男性のゲイと女性のレズビアンと対する社会の反応の仕方を見たときに、男性のゲイに対する嫌悪のほうが女性のレズビアンに対するものより強いんですね。アメリカで作られた映画なんですけれど。日本は違うのかな。

参加者F 日本の場合、オネエキャラはそうでもないですが、女性のゲイを売り物にするようなのは全くないですね。日本の場合、男性のゲイと女性のゲイとで違いがあるのではないかな。

中村 オネエキャラで取り上げられているのは、ゲイだからというよりは女装が面白いということで、それは同性愛だからという問題とは違って、

女性つばいというキャラクターが売りでそれが面白いということだと思えます。これは男性が女装するのと女性が男装するのに対して社会的見方にもすごく差があつて、たとえば宝塚の男役つて嫌悪とか憎しみの対象にならないじゃないですか。普通にあこがれの対象にするわけですが、いつの時代もこれは世界中そうです。いわゆる男装する女性は見下す対象にはなつてこなかったのですが、女装する男性は、お芝居の世界で言うところとコメディでやつてきた、笑いを作る人だったので。宝塚の男装の取り扱われ方と、男性が女装しているオネエキャラが面白おかしくの取り扱われているそのことと、それは社会がキャラクターをどう見ているかぐらいの違いしかないので、そのことと同性愛を結びつけられるかというところ、それは違うと思えますね。宝塚もレズビアンの多い集団だと言われているので、男役の何人かが私はレズビアンですとカミングアウトしてがーつと広がったとしても、あんまり嫌悪とはならず広がる可能性はあると思います。

受け入れるということ

参加者G 今日のテーマとは外れるかも知れませんが、リオ先生つてすてきな方だと思つたのですが、相手を認めて相手の生き方を尊重して、そういうことに秀でている人なんです。でも、リオ先生自体の考え方というものもあるだろうと思うのですが、そういうものは伝ええないのか、そういうことが不思議で。それと、アメリカに限らず芸術家というのは、

そういう受け入れる、尊重する、そういう人たちなのですかね。

中村 リオ先生にはいろんな考え方がありますが、リオ先生の考え方の根幹にあることが他人を受け入れるということ、それが一番強いので、基本的に誰に対してもオープンなのです。たとえば、暴力に対しては自分自身の明確な考え方もあって、誰か男の人がとても腹が立つから自分の妻を殴りたいといった場合、殴れ殴れとは言わないわけで、そのときは相手に伝わる形で、カウンセラーみたいな感じなんです。自分の考えを伝えます。頭ごなしに、「おまえだめだろう」と拒絶する形でなくて、その人がなぜ暴力に走ってしまったのか、そういうことをいっしょに聞きながら、最終的な解決手段としてはよくないから別の方法を考えられないだろうか、というように持つて行く人なので、リオ先生に暴力で行くのを伝えたら、嫌われたり、おまえは最悪の人間だ、と言われるからそのことは打ち明けられない、というようなことはないんじゃないかと思えます。そういう伝え方をする人ですね。それ以外のことについては、人を激しく理由もなく傷つけるようなことに対しては彼自身も傷つくので、止めて欲しいという考えをもっていますが、それ以外のことにかんしてはすごくオープンなので、人生の選択に関してはすべて受け入れているという感じですね。あと、芸術家についてですね。芸術家というのは、ちよつと変わった人たちだと思えますね。そういう受け入れるという姿勢がないと芸術は進化しない、というか………。

参加者G 日本人は一般的に、認めるというか、相手の生き方に口出しせずに見るというか、そういうところまでは行っても、相手と自分の

考えが違ふと意見したがる傾向があると思うのですが、芸術家というのはそういうこととは関係ない感じですかね。

中村 芸術家はむしろ意見を言いたい人たちだと思いますね。自分が自分の意見を言う以上は相手の意見も聞かなければいけないという最低限の合意をいつもしている人たちだと思いますね。自分の考えであつたり自分の作品であつたり、それが相手にどう受け入れられるか分からないものを常に生み出している人間なので、それが受け入れられるかどうかにかかわらずそれが世に出たときに、いろんな批判が出てきたときに、とりあえずそれも受け入れなければいけないですし、それ以外の人たちが新しいものを作つたり新しい考えを表明してきたときにも、もちろん、それに対して意見は交換するのですが、それを遮断するのはできない。

LGBT、コミュニティー

参加者F 最近 YouTube にアップされた動画でドキュメンタリーなんです。カナダの女優、彼女自身がゲイであることをカミングアウトしたのですが、カナダの女性ともう一人の男性の外国人なんです。日本のゲイシーンをルポルターージュした動画がアップされているのです。まず、新宿二丁目に行つて、最後に日本の男性がカミングアウトするところで終わっているのです。その最初の新宿二丁目のインタビューで、バーのマスターが、昔、30年40年前ですが、その昔の新宿二丁目と今とは全く違ふと。いまはとてもオープンになっていると。昔は隠れてこっそりに来

たのを知らないようにしていたのと答えているのですよ。インタビュアーにどっちがよかったと聞くと、新宿二丁目のマスターが、そりゃ昔の方がよかったと答えているのですが、その点についてはどう思われます？

中村 たぶん、それが、私自身が踏み込めないLGBTのコアな世界なのでないかなと。

参加者F 禁止されているからこそエロスが増す……

中村 そういうのも多分あるでしょうし。そうですね、私自身がLGBTの活動とかそういう世界で生きている人に対して、理解しづらかったことは、ある意味彼らも自分たちのコミュニティーが強よすぎて、ちよつと排他的なのですね。だから、よくレズビアンやゲイの人たちで、自分は生まれながらにレズビアンでありゲイであると確信している人たちは、バイセクシャルをどう見ているのか分からなくて。これはレオも言っていますが、

昔は差別がもつとはつきりしていて、自分たちのコミュニティーを強くして自分たちは無二で変えられない、自分たちはここで行くしかないというくらいのもがないと生き残れない、そういう時代があったと思うのですね。その中にあることは守られていることだから、ひとつの安全性を保つことができたのだと思います。いまはもつと入りやすくなっているし、出入りも自由になってきているので、それまでの人は、新宿二丁目こういう暮らしをして、というような決まりがあったのが、それがいろんな形で出てくると、彼らは彼ら自身で、違うタイプ、違う次元の人が出てくるとちよつと脅威を感じたりするのでないでしょうか。リオ先生に一度、LGBTを嫌う人たち、LGBTを否定する人が出てくるのはなぜでしょう

と聞いたら、人間は変化を恐れるからというのが答えでした。それまでに杵築挙げた安定した地位であったり、規範であったりしたものが揺らいできたら慌てる。これは今の社会のシステムでもそうですね。会社組織であったり、役所であったり、そこでは、新しいことが始まるとか、新しい風が吹き始めたときに、変化に対して脅威を感じる人は必ず出てきて、自分たちがこれまでやってきたのが正しい、それは間違いだ、反発する勢力は必ず出てくる。それと同じで新宿二丁目なら新宿二丁目、これまでの俺たちのスタイルがあつて、若い世代の変化を脅威として感じたのでないかなと。

売春

参加者F あとちよつと唐突ですが、売春についてはどう思われますか。具体的に人間としてのゲイを知ったのは、学生時代に、友人とまでは行かないのですが、アルバイトとして男相手の売春をしていた知り合いがいたのです。彼がゲイだったかどうか分からないのですが、純粹なバイトだったのかも知れませんが、そういう売春行為というのは、ホモの世界でもヘテロの世界でもいっしょだと思えますが、認められますか。

中村 認める認めないというのは非常に難しいですね。もし本人がそれを望んでいないのならやらなくてすむ方法があつて欲しいと思いますが、もしそれが最終手段でそれをしなければ死ななくてはいけないような大変な状況だったら、それもひとつのサバイバルな方法だと思えるので、

だからそれを肯定しているのかといわれればそうではないのですが。

参加者F 実際に売春は広く行われていると思うのですが。

中村 行われていますね。特に貧困層では。そういう方向にかなり走っていていますから。それがなかったら生きていけないのなら、それは最低限のサバイバル手段ですね。自分がそれをしなくていい地位にいなながら、それをする以外生きていくことができない人に対して、「君、それは間違っているから止めたまえ」とは、私は言えないので。もし、その人がそういう生き方を望んでいなくて、それでもそういうことをしなければならぬ状況に陥っているとしたら、それは社会としてそれをしなくてもいい方向にシステムを変更していくべきだし、サポートをする体制を整えるべきだと思いますね。

ナガサキレイン

早川 「ナガサキレイン」の話が最初にありまして中村さんはオーディションに受かったということでしたが、どういうオーディションだったのですか。それから「ナガサキレイン」そのものですが、リオ先生は被害者だけでなく加害者でもあるという発想から始められたと聞いたのですが、演劇をみんなに一般に見せるような形でやられて、しかもその演劇の内容はどういうものだったのですか。

中村 オーディションはグループオーディションで、いろんな人が集まっていろいろ自分について話をしたり、目をつむって昔のことを思い浮かべてそ

れを話してくださいとか、ひとつのお題を投げかけられてそれを動きで表現するとか、そういうことで人と共同作業ができるかどうか、相手を理解できる人かどうかとかを見定める程度のことと、自分は目を閉じて瞑想みたいなことをしてそのあとに自分の過去について語ることがあったので、そのときたまたま実家でおでんを食べていたことを思い出しておでんの話をしたら、リオ先生が「おでん、いいよね」というようなことを言ったので、なぜこの白人の先生はおでんのことを知っているのか、その辺からリオ先生の謎だったので。おでんでオーディションが受かったような感じでした(笑)。

そのパフォーマンス自体は、創作劇なので台本があつてきちんとそれを演じるのではなかったたので、プロセスを通して教えるのが、教育機関ですし、それをやらなければならぬので、そのなかで過去の紛争とか9・11のことであつたりとか、そういうものをみんなで話合ったり、それに関連する体験記をみんな読んで話合ったり、詩を書いたり、文章も書きましたし、歌を作ったり、そういうのを身体の動きで表現して、そういうのをいろんな形でいろんなエクスサイズしていつて、最終的にその中から良さそうなものをつなぎ合わせてパフォーマンスをしました。

ただ、9・11の直後で、メンバーのうちの一人が幼なじみの子をテロで亡くした直後だったので、そういう話だと泣いちゃったりするのですね。苦しくて、ニューヨーク出身の子だったし。そういう子がいる一方で、親がアラブ系という子がいたりして、これはどっちに付いたら良いのかという緊張感もあるし、だけどそこできちんとして、これは芸術家の運命でもある

のですが、お互いに自分の気持ちを正直に語らなければいけないですし、それを聞く側もとりあえず一回はきちんと聞いて、いつしよに考えなければいけないということ。これはかわいそうなアメリカの中で、本当はかわいそうな日本についてやっていることだったのですが、そのグループの中に韓国人の子がいて、その子の叔母と祖母が第二次世界大戦中に日本軍に捕らえられて、原爆が落ちていかなかったら処刑されている状況で、だから、日本人はかわいそうだ、だけでなくて韓国にたいしてはかわいそうなおことをしているんですね。誰かが正しくて誰かが間違っているという一方的な状況ではなくて、みんながそれぞれに痛みを負っているし、被害者であり加害者であるという状況で、二ヶ月間くらい、ずっとみんな話合ったりして。涙は流れますし、しかもいまでもみんな仲間ですから、そう宇ところまで持つて行くのがリオ先生の手腕だったかなと思うのです。パフォーマンス自体はものすごく受けていつも満員御礼でした。

アメリカという国

参加者D いまのような話を、リオ先生のような話を聞いているとアメリカは本当に良いなと思うのですが、今大統領選に出ているトランプさんですね、ああいうのはなぜ出てくるのかと。どう思われますか？

中村 私だつてそれは知りたいですわ(笑)。アメリカ、どうも人材難だと思います。うーん、対抗馬も弱すぎる気がします、アメリカだけでな

くて世界中でああいう人が受けていますね。どこもああいう方向に行つていて、アメリカも二分されていると思いますね。9・11が起きたあと、周りではものすごく言われたのですが、自分の周りにいたリベラル派の人はいつせいにカナダに逃げるとか、アメリカでは保守派が真ん中へんにいて東側と西側にリベラルがいると言われるのですが、国をそういうふうに分けて国をアメリカ1とアメリカ2に分けようとか、盛んに言われていたのですが、私が留学していたのはブッシュの時代ですから、トランプとどれくらい違うのか。アメリカつてそういう国ですごく極端なものです。イデオロギーとしては二分されているのです。それが交互に出てきて、その交互に出てくるのがアメリカのすごさかなと思うのです。ずっと片方だけで行かずに入れ替わっているというのがすごいので、まあトランプが出てきたというのは、オバマが8年やったからだという気がしますね。それがよかつた、悪かつた、じゃなくて。

最近シエラ・ハウスに住むようになってアメリカ人のルームメイトがいるのですよ、18歳の男の子で。彼はトランプが出てきそうなので、住民票をカナダに移したのです。そこまで極端な話になっていて、冗談でもあるのですが、私、もしかしたら彼大統領になるかとも思ったりしています。彼もいままでの共和党とは違うので、何が起きるか分からないですが、意外とまともだったり。よく分からないです。外交は今までとがらつと変わるの、口で言ったことなどできないというのか、意外と実行力があるのか、そのあたりは分かりません。今まで口にしてきたことは、これまでやってきた外交とは全く違うので、それはそれで世界が右往左

往するとは思いますが、アメリカの孤立が余計深まるので。新聞に書いてあることしか分からないですね。アメリカウオッチャーではないので。

ホモ

参加者 A LGBTの中にホモってありますよね。どういうことですか。

中村 ホモというのはホモセクシャルを短くしたもので、ヘテロセクシャルの短くしたのがヘテロです。昔、ホモセクシャルの人を指す言葉としてホモと言っていたて、その時代というのはホモセクシャルの人たちが激しい差別に会っていたのです。ホモという言葉が蔑称のように使われていて、いわゆる手垢が付いちちゃったんですね。それを本人たちがいやがって、違う言葉で置き換えようと、ゲイというのは明るい言葉らしいのですが、ゲイを使い始めた。ゲイには蔑称の手垢が付いていないので、それを使つていうことになったのです。レズビアンも、レズ・レズという言い方の中に、それがあまり受け入れられなかった時代のイメージが付いているので、レズを蔑称と感している人もいますので、レズビアンと言つたほうが良いと思いますね。これまで日本にも差別用語はあつたと思いますが、それを使うことで本人たちがそれで括られてよくないということ、たとえば、視覚障害者といいますが、昔は違う言い方があつたのですが、今はそうしようと。

参加者 A アメリカでもそういうことがあつたということですね。

中村 はい、ありました。

いろんな人が幸せに生きていける社会を

参加者 H 今日は貴重な話をありがとうございました。最初はLGBTだったと思うのですが、不登校の問題だとか、今日NHKでやっていたのは臨床スペクトラムのこととか、いろんな人たちのことがちよつとずつ分かっていく時代だと思うのですが、私は保守的な仕事をしているので、かつて女性が入れなかったようなところで仕事をしているので、見方によつては「ねーちゃん、ねーちゃん」と言われるようなことが多いと思うのですが、みんなが幸せに生きていけるようにいろんな人たちと協力してやつていく、私がこの仕事ができるのは師匠である人がそういう道を、この方は八十いくつの方なのですが、女性を受け入れて「君に託すよ」と言つてくれた先輩方がいらつしやつたので私はやつてこられたと思うので、是非いろんな人が幸せに生きていける社会を作つていく、それが皆さまと経験が違うので理解していつてもらえとすこく、住みやすくなるし幸せになつていけるのではないかと。これはエールを込めて。

中村 ありがとうございます。最後にすつこくうまくまとめていただいて(笑)。彼女は酒蔵の杜氏さんなのですが、珍しいですね、女性の方で。私も昨年ごろから知り合つて、すごいと思いますね。杜氏の世界というのも、さきほど言われたように男の世界でそこに女として入っていくには大変なところもいろいろあると思いますが、理解があつてやれていくところがありますし、自分は今ジャーナリズムの世界にいますけれど、ここも本当に男の世界でそこに入ると紅一点のような世界であるんですけれ

ど、それを応援してくれる人がいたりして成り立っていて、自分も少しずつ負けずにやっていくし、周りについてくる若い女の子がいたりすれば、その人たちのために背中を作りたいという気持ちもあります。そういうふうにして、世の中は変わっていくし、多様性がつくって行かれると思うので、それをひとり一人がやっていけたらと思います。

早川 それではこれで終了にしたいと思います。ありがとうございます。ありがとうございました。

中村 ありがとうございます(拍手)。

E (50代、女性)
F (50代、男性)
G (60代、男性)
H (40代、女性)

一・参加者(26名)

大上あゆみ、大江美里、大橋猛人、岡由美、木戸口武夫、糀谷由紀、治部ひとみ、下西孝明、田歌昇、田中洋子、戸田隆、戸田千乃枝、中川和夫、中野英二、橋田国夫、早川博信、早川恵子、早川智子、早川真理子、早川由紀子、福本人司、藤田晶子、古谷千春、
蒔田憲三、松原朋子、山口孝志

二・発言者(8名)

- A (70代、女性)
- B (60代、男性)
- C (50代、男性)
- D (50代、男性)